

地域包括ケアシステムの現場  
自分が受けたケアの実現

## 高齢者総合ケアセンターこぶし園

自分が住み慣れた地域で人生をまっとうしたいと思つのは、誰にとっても自然なことだ。ただ、それには地域に、安心して頼れるケアシステムがなければ実現しない。それを実現している、新潟県長岡市高齢者総合ケアセンターこぶし園の現場を訪ねた。

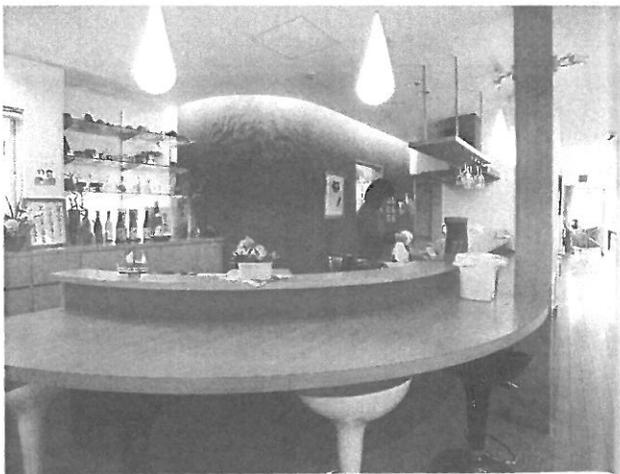


サポートセンター摂田屋。各居室はまるでテラスハウスのようなおしゃれな外観になっている。各室に外玄関があって、左に見える施設の玄関を使わずに家族や知人と会える

新潟県長岡市にある社会福祉法人長岡福祉協会が運営する、高齢者総合ケアセンターこぶし園。二〇一四年二月現在、市内に一六か所のサポートセンターと四五〇人余りのスタッフを擁し、二四時間三六五日対応で各種介護や訪問看護、三六五日三食対応の配食サービスを行っている。各施設は原則それぞれの施設から一〜三キロ圏内に居住する高齢者に利用してもらうことで、地域包括ケアシステムを実現している。

二四時間三六五日対応が基本  
JR宮内駅近く、多くの市民が暮らす住宅地の中に施設は位置する。この施設は、地域密着型小規模老人福祉施設（特別養護老人ホーム・定員二〇名）、小規模多機能型居宅介護摂田屋（登録人数二五名、通い一五名、泊まり六名）、在宅支援型住宅（二〇室）、認知症対応型共同生活介護（グループホーム・定員九名）を備え、さらにカフェテラス、キッズルームを併設している。配食サービスも、入居者だけではなく地域の在宅者にも三六五日三食休まず届けている。

こぶし園の施設長で、長年地域包括ケアシステム導入を唱え、実践してきた小山剛さんに話を伺った。  
「摂田屋は自前の施設ではないんです。地主さんが建物のオーナーで、私たちが設計のお手伝いをして地元の建設会社が建てたものです。利用者はすべてこの地域の方々と、私たちは地域に根ざした介護および配食サービスを、二四時間三六五日提供しています」



地域の人が集えるカフェカウンター。持ち込みで飲酒も可。昼はテラス席もあって、地域のカフェとして機能している

なったことにもよる。これで利用者にも自前の施設を提供する必然性はなくなった。自宅でも、アパートでも介護と配食さえできればケアは可能という考えだ。  
「こぶし園は定員一〇〇床の特別養護老人ホームとして一九八二年にスタートしましたが、本当は本人も、家族や地域から離れ他人と同室での暮らしを望んでいないことを知りました。ならば、地域に帰そうと、そのためには地域で過ごせる介護サービスを提供しよう」と、八〇年代後半から次々に手を打ってきました。九五年からは二四時間三六五日対応の介護・

訪問看護に取り組み、さらに一日三食の配食事業にも参入しました。それがあって、二〇〇四年に長岡市がサテライト型特養で構造改革特区に指定され、こぶし園一〇〇人をすべて地域に戻そうと、現在まで一六のサポートセンターを設けて運営してきました。今年三月、最後の三〇人が地域へ戻ることで完了します」

### カフェとキッズルームの効果

小山さんは三〇代のとき、介護のプロとして親の介護に取り組んだが、子育てや仕事との両立ができず苦労したことから、自分でこ

うあればよいというケアの仕組みに取り組みとうと決めたという。  
摂田屋の特徴はいろいろあるが、ひとつが特養の各部屋に外から直接出入りができるドアがあること。誰に気兼ねなく生活できる構造になっていることだ。入居者は「要介護4」以上の人がばかりだが、認知症の人への対応も含めて、ケアサービスとしてできる限りの対応はするが、家と同じように生活ができるということでは、在宅と同様の事態が起こる可能性についても説明をしているという。  
また、摂田屋の大きな特徴となっているカフェとキッズルームについて、業務課長の上村三郎さんに伺った。

「住み慣れた地域に施設ができる、これまでの地域の関係がそのまま継続できます。家族や知人が遊びに来て、入居者と会うだけでなく、地域の人が集まってお茶を飲んだり、あるときはお酒を飲んだりできる空間があるというこ



摂田屋の特養個室。外玄関があり個別に出入りができる。玄関を開けているのは高齢者総合ケアセンターこぶし園施設長の小山剛さん



放課後になると地域の子どもたちが遊びに来るキッズルーム。ゲーム遊びを存分に楽しんだり、ときには高齢者との交流も生まれる



サポートセンター摂田屋の業務課長・上村三郎さん。カフェやキッズルームがあることで、地域での日常生活を送ることができる



この3月に最後の入所者が地域へ帰還し、入所者ゼロになった介護老人福祉施設としてのこぶし園。長岡市郊外に位置する。サポートセンターとしての機能はまだ残る



サポートセンター大島。小規模多機能型居宅介護のサービスに加え、必要に応じて訪問看護を提供できる施設。カフェテラスとキッズルームも備え、地域の交流の場としても機能している

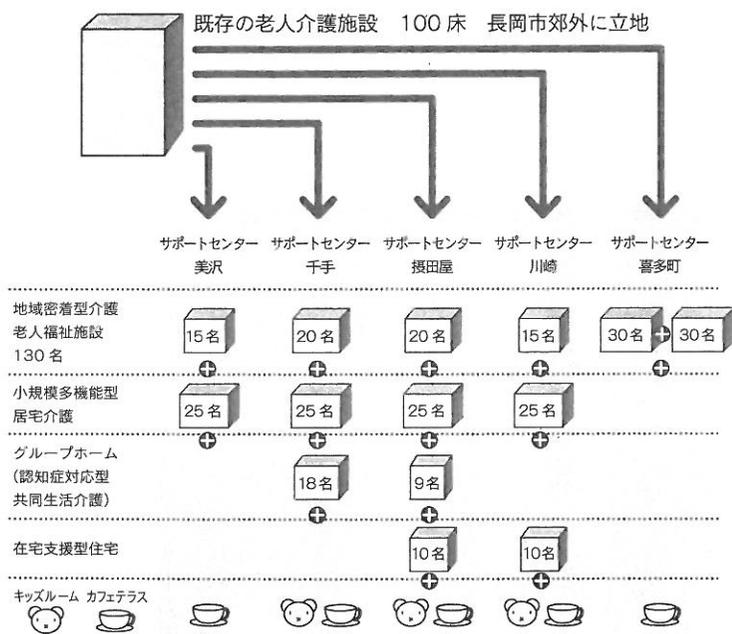


サポートセンターしなの。市の施設に運営者として参加。ケアハウス、通所介護、訪問介護、訪問看護、配食サービスなどあらゆるサービスを提供し、地域の交流センターや診療所、フィットネスクラブまで併設している大型複合施設

地域密着型の施設だが、まだまだ地域でもよく知らない人がいる。もっともっと地域の人に知ってもらいたい、そのために努力していきたいと語る相談員の上原舞さん



### 高齢者総合ケアセンターこぶし園が進める地域への「帰還」



高齢者総合ケアセンターこぶし園 代表 ☎0258 (46) 6610  
http://www.kobushien.com  
E-mail info@kobushien.com



地域の施設で過ごせて日々とても楽しいという、歌の大好きな入居者



保温容器に入った夕食、施設の配食ルームでは、入居者だけではなく地域の配食利用者用の食事もある。調理担当者が地域への配達も行うが、近所なのでちょっと離れへ届ける感覚だという



介護・看護職員と医師が持つタブレット。請求業務の軽減とシフト確認、利用者の状況把握など、情報共有の有効手段として活躍している

### もっと地域の人に知ってほしい

これはだけ利用者目線に立った

とは、日常の生活がここにもあるという事です。学校が終わって子どもたちが遊びにくると、自然と利用者との交流もでき、孫と祖母のような光景もときに見られます。地域とつながっているというの、利用者にも、家族にも、そしてここで働くスタッフにとっても日常的な日々となり、ケアの仕事も、よりやりがいをもってあたる事ができます

若いスタッフが生き生きと働いているのは、そんな地域との関わりも大きく影響しているように見える。

ていくことです。そうしなければケアの現実が変わりません。また、特に社会福祉法人はその要望に応じていく必要があります。できるできないではなく、やるかやらないか、私たちの取り組みはやれば

どこでも、誰にでもできます。全国で取り組んでほしい」と強く訴えます。

この春、地域への全員「帰還」が完了するこぶし園、今後のさらなる進化に期待したい。

施設をつくり、運営しているこぶし園だが、それでもまだ地域の中でも知られていない面もあるという。こぶし園に入って四年、撰田屋で相談員を務める上原舞さんは言う。

「入る前はわからなかったのですが、今、こぶし園が目指している地域包括ケアについては、実際に携わってみて、とてもよいシステムだと思っています。開放的な施設の中で働いていると、いつも誰かの目があるわけですから、仕事も必然的に誰に見られても全然かまわない、クオリティの高い内容に自然になってきます。ただ、地域と良いながら、直接関わりのない方には、こんな施設が地域にあるんだということさえまだまだ知られていません。いずれ自分や家族に必ず縁ができる分野ですから、せめて地域の人には知ってほしい、そのために私たちももっと伝える努力が必要だと思っています」

訪問するための道路は廊下、ア

パートや自宅は居室、ならば訪問介護・看護サービスも施設内と何ら変わるところはないという。

また、利用者の居室には、訪問介護者を含めてテレビ電話を提供し活用したり、事務作業軽減のために導入したタブレットで、利用者の必要情報は医師・看護師も含めてスタッフで共有している。先端技術を道具として生かすことで、十分とはいえないスタッフの人数でも、二四時間三六五日対応をすためだ。配食も施設・在宅の両方を配食スタッフが担当、一日三餐の配達は、利用者の状況把握も兼ねている。

「みんなに言うんです。自分が利用者の立場になったとき、今住んでいる自宅で、あるいは生活の延長にあるような施設で、二四時間三六五日のケア、サービスを受けたいでしょうって」

そう語る小山さんはさらに、「その実現は、利用者であるみなさんが具体的に声を出して要望し